

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
本校の教育テーマ「国際理解教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野と主体的に生きる力を有する生徒を育成する	<ul style="list-style-type: none"> ■公開授業の回数を増やして授業改善に努めたが、家庭学習時間数の増加にはつながっていない。生徒の学習意欲向上につながる授業改善を一層進める必要がある。 ■中堅私立大学の合格状況は改善したが、国公立大学及び難関私立大学については、やや厳しい結果であった。入学時から学習習慣の定着の指導に力を入れ、学力向上を図る必要がある。就職は100%の内定を得ることができた。 ■「国際理解教育」「環境教育」「表現活動」の関連性を高めた取組を「総合的な学習の時間」を使って実施することができた。環境委員による環境保全活動の取組と教職員によるKES認証の更新をともに継続することができた。 ■広報は、ツイッターやホームページ、毎月のお知らせマガジンの発行により積極的に展開できた。しかしながら、生徒募集が厳しい現状を踏まえ、より魅力をアピールする方策を進める必要がある。 ■部活動指導は、日々の指導に加え、部集いを定期的に行って人間性と社会性の育成、目標に向け努力する気持ちを大事にする指導に努めた。 ■京都府自転車安全利用推進員は取組3年で900人を超える生徒が受講し、京都府より「自転車安全利用取組優良モデル校」の認定を受け、鍵1グランプリにおいても第1位の表彰を受けることができたが、自転車の安全運転については継続してさらなる注意喚起を図る必要がある。 	<p>【目標】</p> <p>希望進路が実現できるよう学力を向上させる。特別活動と部活動の充実を図ることで自主性と社会性、規範意識を養う。コミュニティースクールとしてこれまで以上に地域から愛され信頼される学校づくりを行い、3つの教育テーマ「国際理解教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連させた教育活動を充実させる。</p> <p>【項目】</p> <p>1 学習指導</p> <p>(1)新学習指導要領の改訂ポイントを踏まえ、各教科で主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の研究と実践を行う。</p> <p>(2)教員相互の授業参観を行うことで資質能力の向上を図るとともに生徒の学力向上につなげる。</p> <p>(3)生徒の学習意欲を高め理解を深めさせるために、ICTを活用した授業の開発に取り組む。</p> <p>2 進路指導と生徒指導</p> <p>(1)希望進路の実現に向け、一人ひとりに応じたキャリア教育を推進する。</p> <p>(2)北稜祭等の活動を通して生徒の自主性を養う。</p> <p>(3)挨拶や身だしなみ、言葉遣い、スマートフォン使用ルールの指導に力を入れ規範意識を醸成する。</p> <p>3 部活動指導</p> <p>(1)学習と部活動を両立させる指導に力を入れる。</p> <p>(2)部活動員に学校生活のリーダーとしての自覚をさせ、あらゆる活動に意欲的に取り組ませる。</p> <p>4 魅力ある学校づくりと情報発信</p> <p>(1)生徒が協働して課題解決型学習に取り組み、自ら考えたことを校外に発信する機会を設ける。</p> <p>(2)学校の日常の取組が保護者や地域によりよく分かるように、ホームページやツイッターをさらに充実させる。</p> <p>5 地域との連携</p> <p>(1)学校運営協議会を立ち上げ、コミュニティースクールとして地域の信頼を一層得るための努力を続ける。</p> <p>(2)近隣の大学や研究機関、小・中学校と学習や文化、スポーツの交流を行い連携の強化を図る。</p>

評価領域	重点目標	具体的方策	評価基準	評価		成果と課題
				項目	総合	
第1学年部	基本的な生活習慣を確立する	・主体的な挨拶、身だしなみチェック、清掃活動等ができるよう、また時間を守って行動する態度を身に付けさせるよう、教員からの働きかけも工夫する。	・挨拶はされてから返したり促されて行うのではなく、自ら発声できたか。 ・集合時間や提出物について期限を守って行動できたか。	B	B	自発的な挨拶は半数以上の生徒ができていた印象であった。また、集合時間等は5分前行動が定着しつつあり、学年行事や集会等は毎回時間より早く開始することができた。提出物は毎回同じ生徒が多数科にわたって未提出であることが多く、改善策を講じたが、あまり効果がみられなかった。
	自己理解を深めるよう、学習や行事等への積極的参加を促す	・授業、考査、部活動、課外活動への計画的な取組、また学校行事、学年行事への積極的参加を促す。 ・自らの言動を振り返りすることで自己理解を深め、進路について考える機会を定期的に設ける。	・授業態度調査で氏名が上がる生徒数を抑制できたか。 ・ポートフォリオの記録を取り、定期的に入力できたか。	B	B	授業態度調査では、年度当初は落ち着きのない男子生徒がみられたが、次第に落ち着き、提出物の未提出や怠惰な生徒は3、4名に固定化された。担任等からの指導を継続している。また、定期考査の振り返りは毎回行い、行事等の振り返りも記録してポートフォリオに入力するよう指導した。
第2学年部	基本的な生活習慣を確立するとともに規範意識を高める	遅刻・無断欠席、欠課をなくすよう、生徒と保護者に働きかけるとともに、教師間の連携をはかる。挨拶・服装・頭髪を整えるとともに、家庭・学校・社会のルールを守る規範意識を高められるようHRや学年集いで話しかける。	学年による指導回数を減らす。 学年集いを学期2回以上	B	B	携帯電話や生活習慣での指導が増え、減少にはなっていない。不定期であるが実施できている。
	学習習慣の定着を図り、学力向上に努める	各教科と連携をとり、毎日HRでの小テストを実施し、家庭学習につなげるようにする。希望進路をできるだけ早く明確にさせ、目標に向けて学習に取り組むようにさせる。	小テスト回数と点数及び家庭学習時間の増加個人面談回数の増やす。(学期2回)	B	B	SHRでの学習は定着しているが、そこから家庭学習へとつながっていない。学級によって差が見られるが、概ね2回ずつ実施できている。
第3学年部	社会に出ていくにふさわしい人物に成長できるようにする	・挨拶・身だしなみ・言葉遣い・話を聞く態度など、今後の人生を歩んでいくうえで必要なものを身に付ける。 ・集合時間や提出期限等、時間を守る人間を育成する。 ・日々の授業を大切にすること、その場に適切な対応をする力を身に付ける。	・基本的な礼儀作法や規範意識が身についたか。 ・昨年度より遅刻の数が減ったか。 ・あらゆる提出物の期限を守ることができたか。 ・昨年度より授業規律違反の数が減ったか。	B	B	・受験勉強や気のゆるみで生活リズムが崩れた生徒も一部いたが、大半の生徒は規範意識をもって学校生活を送ることができた。
	進路希望実現に向けて精一杯努力を重ねる姿勢を持てるようにする	・節目ごとに面談を行い、生徒が自分の進路希望を実現できるようにサポートを行う。 ・進路目標実現に向けて、模擬試験の受験や進学補習の受講などに対する意識の向上を目指す。	・年3回は面談を行う。 ・大学進学者が校外模試を複数回受験できたか。 ・進学補習受講者の出席率7割を目指す。	A	A	・生徒の進路目標実現に向けて、まめに面談を行い、サポートすることができた。 ・厳しい入試状況の中、目的意識をもって学習に向かう生徒が増え、校外模試や進学補習に積極的に取り組む生徒も一定数存在した。

国語科	生徒の学習意欲を高め、しっかりと家庭学習を確立させる。	・予習や復習のきめ細かな指示と確認、小テストの定期的実施を行う。 ・定番教材の指導方法を見直し、生徒が主体的に参加できる授業形態をさらに工夫する。	・進路指導部実施による家庭学習時間調査において、国語が週3時間以上になるようにする。 ・文章表現の基礎的な力を養い、他者と協働しながら探究活動準備ができたか。	B	B	・学習強化週間の調査において、国語の学習時間が不十分であった。そこで2年生の現代文と古典では、家庭学習につながるような週末課題を出すなど工夫ができた。今後は他の各科目において生徒の実態に合わせたきめ細やかな工夫が必要である。 ・今後の「総合的な探究の時間」では、探究活動のための基礎的なリテラシーを中心に、豊かな表現力を育成していく。
	多様なそして多数の語彙を習得させ、豊かな世界観を育成させる。	・文法的体系だけでなく、類義語や対義語などの横の広がり、語源などの縦のつながりなど、いわば言葉のネットワークを意識させる。 ・ブックレビューの作成など、読書を喚起させる工夫を各小科目担当で協議し実施する。	読書指導に特化した授業を1・2年生でそれぞれ2時間以上実施する。	B	B	・北稜エッセイⅠ・Ⅱにおいて、春・夏の課題として新書を読むレポート課題や、生徒たちがおすすめの本を紹介する取り組みをし、読書をするきっかけとなった。
地歴・公民科	各科目を通じて「国際教育」「環境教育」「主権者教育」の視点を踏まえた授業展開を心がける。	グローバルな歴史認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向に注目しながらの授業展開を工夫するとともに地域社会との関わり方のなかで、主権者意識を育てる。	絶えず現代世界の動向を見据えながら授業展開できたか。俯瞰的な視点で事象の因果関係を説明できたか。探究学習やレポート作成などを通じて主権者意識を深めることができたか。	A	A	エッセイ総合社会でSDGsの視点でグループ学習やフィールドワーク、外部講師を招いた講座授業などに取り組み、その成果を「清水寺で世界を語る」や学年全体の実践交流会で披露した。また京都華女子大学の「ビジネスプランコンテスト」に実践プロジェクトを応募し、金賞を受賞した。
	生徒の実態に合わせた「わかりやすい授業」の教材開発に取り組む。	すべての科目において、学習内容の精選を行うとともに生徒の視点に合わせた教材開発(視聴覚教材 ICT)を心がける。その際、時事問題や地域の課題などの教材開発、展開を心がける。	教授内容の精選ができたか。新資料や視聴覚教材をタイムリーに提供できたか。レポート、討論など諸場面で活用できたか。	A	A	現代社会や政治経済、地理、総合的な学習などにおいて、国税局の「税の作文」やJICAの「国際協力 中学生・高校生エッセイコンテスト」などに取り組み、「税の作文」では左京税務署署長賞、「エッセイコンテスト」では学校賞及び佳作(個人)を受賞した。
数学科	新テストに対応した授業展開を研究する	・思考力・表現力・判断力を伸ばす授業展開を教科会で検討し、実践する。主体的対話的で深い学びになるような課題学習を学期に一度を目途に取り入れる。	教科会議で授業改善の研究を行えたか。	B	B	研究授業を通じて、主体的対話的で深い学びの授業実践について協議した。また、公開授業週間や教育課程説明会の伝達講習会を通じての研究も行った。ただ、授業改善のための研究協議の回数をもっと増やすことはできる。
	家庭学習の習慣を身に付けさせ学力の向上を目指す	・家庭学習を定着させるために、定期的に課題を課し、小テストを実施する。 ・成績伸長のために進学補習、土曜講座、朝学習で模試や入試に対応した問題に取り組む。また、必要な生徒に対して基礎補充を定期的に行う。	・生徒が提出物や小テストに取り組んだか。 ・各学年で実施される府立高校実力テスト、進研模試の成績を伸ばすことができたか。	B	B	今年度から教科の取り組みとして、学力不振者に対して毎週、さらに夏休みに基礎補充を行った。学習習慣を身に付けさせるための働きかけを行った。進研模試では1年生で偏差値が2上昇した。2年生は横ばいである。
理科	自然現象への興味・関心を持たせ、授業への集中力を高める。	身近な自然現象を授業で積極的に扱ったり、演示実験、模型、ICT機器を活用したりして、興味関心を持たせ授業に集中させる授業改善を行う。エッセイⅡについては、地球研などの専門機関と連携し、地球環境問題に関する知識を習得し、テーマを発見する能力や学んだ内容を発表することで表現力を養う。	自然現象に興味をもてるように授業改善ができたか。提出したレポート課題や授業アンケートの結果を踏まえて検証する。	B	B	模型やICT機器による映像を活用してさまざまな自然現象を見せたり、演示実験を行ったりして生徒が授業に集中し、自然科学に興味を持てるように工夫した。北稜エッセイⅡでは地球研などの専門機関とも綿密に打ち合わせを行い、授業内容・形式の改善を行った。生徒が自らテーマを考え、学習内容を理解し、発表を見据えて表現方法を工夫することができた。依然として実験データの意味を的確に理解し、分析を加えるという点では課題があり、丁寧な指導が必要である。
	日常の学習習慣を確立させ、成績不振を招かない丁寧な個別指導を行う。	年間を通じて日々の授業の重要性を強調する。明確で細かな指示を心がけ、生徒がスムーズに学習に取り組めるようにする。学習習慣の確立のため、課題プリント、実験・実習レポート等を定期的に出題させてチェックし、小テストも行う。それらを評価に加味する。必要に応じて学力に課題のある生徒に対する考査前補充を行う。	年間を通じて授業の大切さを強調できたか。授業中の指示を工夫できたか。学習習慣を確立できるように課題や小テストを課すことができたか。	B	B	授業の大切さを強調するとともに、明確で細かな指示を心がけ授業に取り組めるように工夫した。課題や小テストを課し、授業外のある程度の学習時間の確保につながったが、課題が出せない生徒や小テストで得点できない生徒もおり、引き続き粘り強い指導が必要である。
保健体育科	生徒の学習意欲を高め、主体的に学ぶ授業内容を充実させる	生徒とのコミュニケーションを密にするとともに、授業アンケートの要約から各種目の目標設定の再検討を行い、より達成感や充実感の高い授業にするよう取り組む。グループ学習の中でICT機器等を使用し、自己チェックや相互チェックから課題も見つけ、協力してアドバイスを伝えるよう指導する。授業計画表を作成する際に、アドバイスを聞いて改善することから自ら考える力を伸ばすとともに、生涯にわたってスポーツに取り組むことができたか。	昨年度の授業評価アンケートより、全体の平均値を0.1以上伸ばすことができたか。授業計画表について、提出物や教員との確認を複数回行ったか。グループ学習において、様々な方法を用いて、仲間と協力して取り組むことができたか。自ら進んで授業に参加し、仲間と協力してスポーツを楽しむことができたか。	B	B	授業評価アンケートにおいて昨年度に比べると少し下がったが、前期よりも6項目で評価が上がった。授業計画表の作成にあたり各担当が確認・打ち合わせを複数回行うことができた結果、よりよい取り組みができた。基礎的な運動や取り組みやすい活動を取り入れることによって積極的に取り組む生徒が多くなった。
	安全な授業進行の徹底	単元前に施設・設備・備品の安全点検を担当者が行う。接触時の怪我を防ぐ為に、身だしなみの確認を徹底する。	単元前に担当者が安全点検を行い、チェック表に記入を行ったか。毎時間、授業開始時に身だしなみチェックを行ったか。	B	B	安全確認を行っていたが、施設の老朽化等による破損等が確認されたので毎時間ごとに確認を行う。身だしなみチェック及び健康確認を毎時間徹底的に行えた。今後も継続する。
芸術科	芸術の幅広い活動を通して、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばす授業を目指す	生徒にレポートやアンケートにより、課題の見直しを持つことと、振り返る場面を設定することによって、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。	授業レポートや学校評価アンケート等を用いて、芸術の感性が高まり、諸能力が伸びたと感じた生徒が80%を超えるかどうか。	A	B	芸術科の授業評価アンケートより、授業が技能を高めるのに役立つと感じる生徒は3.36/4と高評価で、中間評価から0.03ポイント伸びていることから、1年を通して様々な課題を行うことで諸能力が伸びたと感じる生徒がいたと思われる。また、課題ごとのアンケートでは、諸能力が伸びたと回答した生徒は96%となった。課題ごとに満足度の違いがあり、今後も引き続き比較検討していきたい。
		主体的・対話的で深い学びの実現に向け、ICTやアクティブラーニングを用いた授業を積極的に取り入れる。	ICTやアクティブラーニング等の新しい技術や授業展開を実践、活用できたか。	B	B	ICTやアクティブラーニング等を多方面からすべての学年、講座に取り入れた。講座によっては少ししか取り入れることのできなかった講座もあり、今後、さらに取り入れるよう工夫していきたい。
外国語科 英語	「国際理解教育」の中心的な教科としての自覚を持ち、生徒の学習意欲を高めて学力を向上させる。	家庭学習を習慣づける。具体的には、小テストを毎週実施したり、予習復習を詳しく指示し点検する。	各小テストの合格率70%、提出物の提出率100%を目指す。	B	B	小テストの実施及び予習復習の点検については実施している。テスト内容にもよるが合格率70%にはほど近い結果となっている。2年生については全体的には1年次に比べると提出物を出すようにはなっているがやはり1年次からの特定の生徒が提出できない。1年生については提出物の提出について意識の低い生徒が多い。今後も継続して指導していく必要がある。
		全体として英語検定受験者数を増やす。2年終了時点で、文理コースの生徒は準2級、英語コースの生徒は2級取得を目指すよう受験を勧める。GTECについても意欲・目標を持って取り組むよう指導する。英語コースについては「アクティブイングリッシュ」「北稜エッセイ」の授業を通してGTECや英語検定の問題演習を行う。	英語検定受験者20%増を目指す。英語コース2年終了時の準2級取得率80%、2級取得率30%を目指す。GTECについては、各学年とも1年後にはコース平均を総合コース30点、文理英語コース60点アップを目指す。	B	B	英検受験者第1回はほぼ同数。第2回は1.5倍となった。現3年生のGAC準2級合格者は11/85(13%)、GECIは9/33(27%)。2級はGAC2/85、GECIは3/33(9%)である。目標に比べて低すぎる。現1・2年に対してもっと積極的に受験するよう促す必要がある。第2回については受験者数に対する合格者の割合は上がった。またGTECについては、アドバンスコースの半年の伸びが42点なので、順調に伸びているといえるだろう。2年GTECについては今年度より検定版(大学受験の際に有効)を受検している。
家庭科	1人の生活者として自立させる。	食生活や、消費者問題を中心に自立して生活することを考える。	献立や実習レポートを作成することで、バランスのとれた献立で作成ができるか消費者としての意識が確立できているかを確認する。	C	C	フードデザイン選択者は実習レポートを作成する中で、一定基準の献立で作成ができた。食品ロスや環境についての意識は個人差があり、徹底することができなかった。
	共生について考えさせる。	乳幼児、高齢者、障がい者との共生について、NIE学習などを通して主体的・対話的で深い学びにつなげていけるようにする。	単元の終わりにレポート作成や、グループグループ学習で各課題に対してどのように考えるかを確認する。	B	B	子どもの発達と保育では「出生前診断」について学習する中で、障がい者との共生について実施した。高齢者については家庭基礎で家族の抱える高齢社会の課題について一定考えさせることができた。
情報科	教室にとどまらず、実生活に目を向ける授業を心がける。	実社会で起こっている最新の問題を例示しながら授業を進める。基本的なPC利用・キーボード利用の修得を目指す。	情報社会の光と影について十分理解し、正しい表現・発信ができること。キーボード操作が上達すること。	B	B	年度の前半で情報社会における影の部分や倫理を絡めて学習した。年間を通してほぼ毎時キーボード操作をいろいろなアプリを使いながら練習した。簡単なWebページの作成をしながら表現・発信の練習も行うことができた。